

送 辞

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様、ご子息のご卒業、誠におめでとうございます。衷心よりお慶び申し上げます。在校生を代表して、百期生の先輩方の門出をお祝いできることを、大変嬉しく思います。

今この場に並ばれた先輩方は、それぞれが全く違うものを見つめ、全く違う場所へ向かおうとされています。そんな先輩方を一言で表す言葉など、きっとどんな辞書にもありません。その多様さこそが、先輩方の豊かさの証明であり、武蔵生たる証拠だと、私は思います。

一言に収まらない先輩方の豊かさは、校内の随所にあふれていました。三年生の廊下の、『本質文庫』と呼ばれるコーナーも、そのひとつです。自分が本質だと思った一冊を持ち寄り、誰でも手に取れるようにした本棚でした。その横には、色々なセリフや一言で溢れた付箋だらけの壁。先輩方は、なにをとっても、常に我々のインスピレーションでした。科学の新発見を全校に貼る先輩も、反戦への信念をかたちにすることを恐れなかった先輩方もいました。そして、我々が不意に投げかけた問いに、先輩方はいつも一を聞けば十を返してくださいました。そのたび、自分の世界が広がっていくのを感じました。

いただいたものを数えようとするたびに、どうしたって返せないのだと気づきます。教えてくださったこと、見せてくださった背中、一緒に作り上げた時間。それらは全て、我々の中に確かに積み重なっています。しかし振り返れば振り返るほど、その大ききの前に茫然とします。感謝を伝えようとするたびに、言葉が追いつかない。それほどのものを、先輩方は我々に遺してくださいました。

盛唐の詩人、岑参はこう詠みました。「山はめぐり、路は転じて君を見ず、雪上むなしく留む馬行の処。」——山道が曲がりくねり、ついにはあなたの姿は見えなくなった。後にはただ、雪の上に馬の足跡だけが残っている、と。先輩方との時間は、あまりにも早く過ぎ去り、ついこの間まですぐそこにいた先輩方は、今日、武蔵から旅立ち、見えなくなってしまう。記念祭でそれぞれの持ち場に全力だった記憶も、体育祭で汗と熱気の中で競技に臨んだ時間も、部活動に打ち込んだ日々も、はたまた例の流行病の渦中も——先輩方と共に過ごしたそのすべてが、今ここで幕を閉じます。それでも、足跡は、消えませんが、先輩方が遺してくださったものは、この武蔵に、そして我々の心に、深く刻まれています。それは、先輩方と出会えたことの、なによりの証でもあります。

在校生である我々は、百期生の先輩方からいただいたものを、次へ渡していきます。どんな形になるのか、それはまだ、わかりません。不恰好かもしれぬ。うまくできないこともあるでしょう。それでも、先輩方が我々にそうしてくださったように、我々もまた、先輩方の信念を、この武蔵の百年を、脈々と継いでいきます。

「長風浪を破る かならず時あり 直に雲帆を掛けて
滄海を渡らん」——大風に乗って荒波を突き破る時が必
ず来る。その時こそ雲のような帆を上げ、大海原を渡っ
て行こう。李白の詩の一節です。先輩方の行く先に、ど
んな海が広がっているのか、我々にはわかりません。

昨日の常識が今日覆される、そんな時代の中へ、先輩方
は漕ぎ出していけます。苦悩や困難に行く手を阻まれ
ることもあるでしょう。それでも、先輩方ならきつと、
それぞれの帆を掲げ続けてくださると、我々は信じてい
ます。先輩方がどこへ行っても、何に挑んでも、武蔵で
過ごした日々と、ここで出会った人たちが、いつかどこ
かで先輩方の風になればと、願っています。

寂しさと、精一杯の感謝を胸に、先輩方のご活躍とご
健康を、在校生一同、心よりお祈り申し上げます。

令和八年三月十八日

在校生代表 高等学校二年

今野 匠 深